

日本の伝統・文化を継承する若者たち

明日への扉

Door to Tomorrow



Hideki Tatsukawa

1980年奈良県生まれ。幼いころから釣りに親しみ、専門学校で釣りの世界を深く学ぶ。卒業から4年後に和歌山県橋本市の竿師・城英雄氏に入門。5年の内弟子修業の末、念願の独立を果たす。



紀州へら竿(きしゅうへらざお)

へら釣りの専用竿で、和歌山県の伝統的工芸品。複数の竹を組み合わせてつくる竿は、魚の微妙な動きが全て竿を通して手に伝わり、へら釣りの魅力を最大限に引き出すといわれ、愛好家たちの垂涎の的となっている。

日本の伝統・文化を継承する若者たちを紹介する映像ドキュメンタリー「明日への扉」をぜひご覧ください。

MOVIE WebやTVなどでお楽しみいただけます。

Web版
パソコンやタブレットでご覧になれます。
アットホーム明日への扉

TV番組
ディスカバリーチャンネル(CS)
冠番組
「アットホーム presents 明日への扉」放映中
毎週金曜日 22:53~23:00

ビジョン
ANA国際線「SKY CHANNEL」にて放映中

NEW!! 最新号のご案内

No.058 / 桶樽職人 原田 啓司 氏

竿さお師し

辰川 英輝 氏

へら釣との対話が楽しい。そんな一本を追い求めて。

言葉を交わすように、竿を通して魚との微妙な駆け引きを楽しむへら釣。専用竿の中でも最高級の誉れ高い「紀州へら竿」は、和歌山県橋本市の伝統工芸品として100年以上の歴史を持つ。

辰川英輝さんは、愛好家たちから「へら竿の町」と呼ばれる同市で竿師を目指す若き職人。釣りに関わる仕事をしたいという夢をかなえ、尊敬する親方の下で研鑽を積んできた。

きっかけは？

辰川「祖父の影響で釣りにのめり込み、釣り関係の専門学校を卒業したものの、やりたい仕事が見つからなくて一度はこの道を諦めたんです。でも、釣りへの思いを捨て切れず親方に弟子入りしました。紀州へら竿をつくらうと決めたのは、それが匠の技の結晶であり、憧れの存在だったからです」

自然に魚を浮かせ、弱らせることなく釣り上げるへら竿は、3種類の竹を組み合わせて生み出される。

まず、手元部分の「元」と、その上の「穂持ち」に使う竹を選ぶ。硬さやねばりなどのクセを確認して竹を選び抜くと、炭火であぶる。火加減を見定め曲がり正し、反発力を調整する。火入れは竿師の命。なぜなら、その良し悪しで竿の優劣が決まるからだ。

一方、先端の「穂先」は、四つの細く割った竹を正方形に貼り合わせ、さらに細く削ることで、どの方向にも強靱になるように仕上げている。

紀州へら竿は美術的な価値も有しているが、その価値を左右するのが持ち手となる「握り」である。辰川さんは、その握りに美しさと使いやすさを兼ね備えた装飾を考え施した。

全ての作業を終えても、まだ緊張を解くことはできない。それは、実際に魚を釣り、そのしなり具合を親方に

見せて初めて評価を得られるからだ。目標は？

辰川「独立に向けて親方から『天集』という竿銘(竿師としての銘)を授かりました。竿に彫る竿銘は自分のブランドなので、その価値を高められるよう頑張るのみです」

独立後、初めて制作したへら竿。まだ高評価には至らなかったが、また一つ成長を遂げるきっかけとなった。「釣り人に楽しんでもらえる竿づくりが大切」という親方の言葉を胸に、これからも若き職人は歩み続ける。明日への扉を開け、また一歩、夢に近づく。

※2010年3月取材。掲載内容は取材当時のものです。

MOVIE MORE!!
最高級の竿づくりに挑む姿を動画で詳しくご紹介しています。ぜひご覧ください。